

もう一つの政治

では、これから私が何を語り、そして政治的な提言をするのか、簡単に一言で要約すれば、それは“もう一つの政治”であり、別の表現をするならば、「先生より出された公案に弟子が答えを出して、資本主義を終わる」ということです。「日本には中国共産党とは別に、もう一つの脅威がある」と、そう言いたいのです。

総裁先生は『資本主義の未来』の中で、「資本主義が死んだ」ということも述べられておられます。

『資本主義の未来』

教団の経営に関係する方々が、資本主義のところに、やたらとこだわっているようです。春頃、私は、「資本主義が死んだ」ということを言ったのですが、それが非常に気になっているらしいのです（HS政経塾での法話「未来創造の帝王学」での発言）。しかし、そんなに驚くようなことではありません。簡単なことです。

日銀がゼロ金利をずっと続けているのに、経済がまったく発展しないのはどういうことかということ、基本的には、「資本主義経済が終わりを迎えている」ということを意味しているだけのことです。はっきり言えば、そうです。

また『新しき繁栄の時代』の中では、先生は次のようにお話されておられます。

『新しき繁栄の時代へ』

今のアベノミクスの行き詰まりは、「超低金利を打ち出しても人々はお金を借りてくれない。そして、銀行は利幅が少ないために稼ぎが減り、潰れかかっている」ということなのです。ここへの抜本的な対策を立てておかねばならないと思います。それは、私にはすでに分かっているのですが、ここでは、“公案”として一般的に述べておきます。

総裁先生が「資本主義が死んだ」、「公案」ということを述べられている以上、直弟子には、「師に出された公案に答えを出し、共産主義を否定すると共に、世界に先駆けて資本主義をも乗り越えていく」という壮大な使命があるはずです。なぜなら我々のイデオロギーは、厳密には単なる資本主義ではないからです。

そしてこれを考えるには、“資本主義の闇”に目を向ける必要があります。そのためにこの【中巻】では、先生の教えに基づいて、“資本主義の闇の入り口”について述べさせていただきます。

ジキルとハイドのようなアメリカ

我々は、日本を中国共産党から守らねばなりません、しかしバイデンの当選を見ても分かりますように、米国にも大きな闇があります。たとえばかつてアメリカは、日本に対する輸出入を封鎖して戦争に追い込みました。その戦争でアメリカは、東京大空襲によって民間人への大虐殺を行い、さらには広島と長崎にも原爆を落として虐殺を行いました。なおかつ戦後に行われた「東京裁判」では、戦勝国は正義と悪を入れ替え、日本が南京大虐殺を行ったことにされました。普通に冷静に考えてみて、こうした歴史を見ても分かりますように、アメリカにはジキルとハイドのような二面性があります。政治には表と裏があるわけです。

実際に、中国武漢発の新型コロナウイルスですが、しかしこのウイルス兵器の開発資金は、オバマ政権時代のアメリカが5年にも渡って援助していたことが、明確に分かっています。下記の動画にもありますように、今現在、世界を襲っているウイルス兵器は、けっして中国が単独で開発したものではなく、アメリカが資金援助していたのです。

動画『アメリカが武漢ウイルス開発を資金提供していた』（1分43秒）→<https://vimeo.com/545350442>



映画『ノストラダムス戦慄の啓示』の中で、高天原において神々が神評定を行っているシーンがありますが、そこに火之迦具土神^{ほのかぐつちのかみ}という神様が酒に酔って現れます。そしてこの神様は、「アメリカ相手にひと暴れ、酒でも飲んで見物しているがいいわ」と高笑いして、イラクのサダム・フセインとして地上に天下り、アメリカと戦いました。

火之迦具土神が地上にフセインとして生まれ、アメリカと戦った時、すでに日本とアメリカは同盟関係にありました。つまり日本神道の一柱が、なぜか日本の同盟国アメリカと戦ったわけです。しかもトランプ元大統領も、アメリカと戦ったフセインに対して「フセインはテロリストを倒していた」と、“フセインを褒めていた”という事実もあります。このようにアメリカには、たしかに光と闇の両面があります。

映画『ノストラダムス戦慄の啓示』の中で、アメリカのどこかの牧場で、レプタリアンたちが牛を食べているシーンがあります。マゼラン星人たちはそのことについて次のように述べます。

「レプタリアン星人たちの地球侵略は予想以上のスピードで進んでいる。

奴らは何度でも入ってきてしまう。結局、地球人に隙が多すぎる。

このままではマイナスの波動を持った国家に、レプタリアン星人たちが取り入って、地球は大混乱になるだろう」

また『UFO学園の秘密』のラストシーンでは、主人公のレイがレプタリンに対して、「お前たちが中国やアメリカに入り込んで悪さをしているんだろ!」と言うと、そのレプタリアンは「アメリカに入っているのは仲間ではない。ライバルだ。知恵比べだ。どちらがこの地球を侵略できるか競っているのだ」と述べます。

このレプタリアンの言葉に対して主人公のレイが、「宇宙協定違反だろ」と述べると、そのやり取りを見ているヤギ型宇宙人が、「軍部が自らの意志で宇宙人と契約を交わしているために、宇宙協定違反とは言えず、我々も手出しすることはできない」と述べます。また『UFO学園の秘密』の最後のシーンでは、「宇宙の闇の神」らしき者が、中国の国家主席とテレビ電話のようなもので話しており、会話が終ると、中国国家主席のもとに、アメリカ大統領から電話がかかってきたところで、映画は終わります。

これらの映画のシーンを見て、「単なる映画のワンシーン」と片付けられないのは、先生が「完全なるフィクションではない」と仰られていることです。

そして先生の御著書『ネバダ州米軍基地エリア 51 の遠隔透視に挑戦する』によれば、どうやらアメリカにも悪質宇宙人が入り込んでいる可能性が十分に考えられます。普通に考えて、悪質宇宙人レプタリアンが、実は密かにマイナスの波動を持っているアメリカにも、入り込んでいる可能性があるのではないのでしょうか？

米議会に強い力を持つ軍産複合体

「アメリカにも悪質宇宙人は入り込んでいるのか?」ということを考えた時、実際にゾロアスター様は霊言の中で、次のように述べておられます。

『ゾロアスター宇宙の闇の神とどう戦うか』

ゾロアスター それはね、軍部のほうは、軍産共同体のほう、産業と軍部のほうは、そのUFOテクノロジー等を取り入れて、軍事的に優位に立とうとしているから。それをばらす大統領は消される。うん。だから、「暗殺されていないだけでも、ありがたい。落選だけで済んだのは、ありがたい」と思わないといけない。

アメリカの二面性を見た上で、「どこかの宇宙人が『宇宙協定』をすり抜けて、アメリカの軍部と契約を交わしてUFOテクノロジーを与えている」ということを考えた時、その宇宙人は本当に良い宇宙人なのでしょうか？

そしてゾロアスター様の霊言の中で、「軍産共同体」という言葉が出てきましたが、金正恩も霊言の中で次のように述べています。

『危機の中の北朝鮮 金正恩の守護霊霊言』

質問者 どこかでトランプ大統領が決断をし、北朝鮮の基地とかを攻撃するということになりますよね。

金正恩守護霊 いやあ、「儲けたい」と考えてるから。今は、軍事攻撃だけでなく、「軍産複合体の大儲け計画」を立ててるとこなんじゃないかなあ。どうやったら長く儲かるかを考えて、「景気回復」と、「財政赤字を消

すための方法」を、今考えてんじゃないかなあ。

「軍産複合体」、これは第 34 代アメリカ大統領ドワイト・アイゼンハワーが退任演説の中で、「米議会は軍産複合体の強い影響下にある」といった趣旨のことを述べて、公に明らかになった言葉であり、存在です。つまりアメリカには「戦争を行いたい勢力」がたしかにいて、その勢力がイラクにも戦争を仕掛けたわけです。

実際に下記の動画にもありますように、アメリカとイラクの湾岸戦争が起きる時、謎のクウェート人少女が「ナイラ」と名乗って現れて、世界の世論を誘導することで、この戦争は始まりました。

動画『**ナイラの嘘泣きによる湾岸戦争**』（56 秒）→<https://vimeo.com/545763349>



今の動画にもあったナイラの“世紀の嘘泣き”については裕太さんとの対談の中で、先生もお話されておられます。

『国際政治学の現在』／国際政治学の現在／3 「民主主義国家は正しい」というのは本当か

大川隆法 今回のイラク戦争は二〇〇〇年代に起きたわけですがけれども、二〇〇三年かな。その前の湾岸戦争は、一九九〇年から九一年にかけて起きました。あなたはまだ生まれていなかったと思いますが。

大川裕太 はい。

大川隆法 今、「正義の戦争」などと言ってもいますけれども、当時のテレビでは、オイルにどっぷり浸かった水鳥の映像が流されたり、サダム・フセイン側がいかにかいひどいことをやっているかといったことを、現地から来た難民のような少女が訴えたりしていました。

ただ、それが実はクウェート大使の娘だったということがあとで分かり、映像も偽物だったということまで分かったようです。「いかに、サダム・フセインが暴虐の限りを尽くし、油狙いでクウェートを侵略したか。人々がものすごい暴政・圧政で苦しめられているか」というようなことを証言してみせたものの、「実は嘘だった」ということが分かったのです。

こちら偽情報をつかまされながらやってはいるので、そのあたりは難しいところですね。

大川裕太 なるほど。

大川隆法 ですから、今はみんな懐疑的になってきて、なかなか動かなくなりつつあるのは事実です。

この“ナイラの嘘泣き”のために、フセイン率いるイラクとブッシュ率いるアメリカが湾岸戦争を戦い、2 万から 3 万 5 千もの人間が命を落としました。しかしその一方で、軍需産業の利益は湾岸戦争をはさんだわずか二年だけで、80 億ドルから 400 億ドルに跳ね上がりました。これは一ドル 100 円で考えると 4 兆円です。ちなみに日本も湾岸戦争の際には、135 億ドル、日本円で約 1 兆 4000 億円を支払い、軍産複合体を儲けさせています。

戦争は町を一瞬で瓦礫の山と化し、人々の暮らしを原始時代にまで戻し、人々の手足を奪うのみならず、友人や家族といった愛する人を帰らぬ人にし、生き残った人からは夢や希望さえ奪い、時には廃人に変えてしまうこともあります。しかし武器を売買する軍需産業、つまり“死の商人”にとって、戦争こそ最も利益となります。

ちなみに 911 テロの後に行われたイラク戦争も同様に、フセイン率いるイラクとブッシュ J r. 率いるアメリカが戦いましたが、このイラク戦争が湾岸線戦争と異なる点は、「イラク戦争では石油利権が、ごっそりイラクからグローバル企業に奪われ、そしてイラクの銀行制度が変えられた」という点です。

しかも下記の動画にもありますように、米軍のウェズリー・K・クラークという軍人の暴露によって、911 テロを起こしたとされる「アルカイダ」とイラクの関係が分かったわけではないのに、アメリカはテロからほんのわずかな時間で、イラクとの戦争を決めていたことも明らかになっています。

動画『**アメリカ軍高官の 911 とイラク戦争の暴露**』（2 分 44 秒）→<https://vimeo.com/547018946>



「軍産複合体」とは武器を売買する軍需産業のみならず、石油利権から医療製薬会社、マスコミ広告代理店まで、戦争によって利益を得ているすべての総称のことです。

目覚め始めている米国民

元CIAのジョン・パーキンスという方が、『エコノミック・ヒットマン～途上国を食い物にするアメリカ』という書籍を書いて、“アメリカの闇の顔”について興味深いことを述べています。

彼によると、たとえばエクアドルから産出される原油100ドル当たり、アメリカの石油会社の取り分は75ドルだそうです。残りの25ドルのうち4分の3は、CIAの「エコノミック・ヒットマン」と呼ばれる作業者によって作り出された、政府の国際銀行への多額の負債（借金）の返済に充てられます。そして残りの4分の1の大半が、エクアドルの軍事費などに使われているそうです。

そのためにエクアドルのような石油産出国であろうとも、100ドル分の原油から国民のために使われる資金は、わずか2ドル5セントほどしかないそうです。

そしてジョン・パーキンスによると、もしもCIAの「エコノミック・ヒットマン」の思惑通りにことが進まないと、「ジャッカル」と呼ばれているCIAの暗殺部隊が行動を起こすのだそうです。たとえばこのエクアドルの元大統領ハイメ・ロルドスは、ヘリコプター事故によって命を落としましたが、この事故もCIAの「ジャッカル」の仕業だったそうです。こうした暗殺を、アメリカのCIAは世界中で行ってきたわけです。

しかしグローバル勢力がどれだけ莫大な利益を得ても、その利益をアメリカ国民が得られるわけではないので、あくまでも問題はアメリカではなく、その背後に潜むグローバル勢力です。ですからそのグローバル勢力が、これまでアメリカを利用して、どれだけ世界を食い荒らしてきたのか、その悲しき事実については下記の動画などから知っておくべきでしょう。

動画『世界を食い荒らすアメリカ』(2分15秒) →<https://vimeo.com/547016287>



そしてジョン・パーキンスによると、「エコノミック・ヒットマン」も「ジャッカル」も共に工作活動に失敗すると、次はアメリカへの愛国心を持ち、正義感と勇気にあふれた若者たちが、戦争に出かけて行くのだそうです。彼によると、その最も良い例が湾岸戦争とイラク戦争だったそうです。なぜならフセイン自身が、もともとアメリカCIAの援助を受けてきた過去があるために、彼にはCIAによる工作活動も、暗殺計画も通じなかったからです。

ジョン・パーキンスは自らの著書の中で、イラクのフセインについてこう述べています。

「フセインは確かに独裁者だったかもしれない。しかし角度を変えてみれば、彼はアメリカや西欧の毒牙から自国を必死に守ろうとした熱烈な“愛国者”だったとみることができる」

そしてジョン・パーキンスは、グローバル勢力が戦争によって荒廃させたイラクと、中国共産党が侵略して独裁支配するチベットについて、下記の動画で、驚くべきことを述べています。

動画『チベットとイラクはどちらが酷い？ (1分30秒)』 →<https://vimeo.com/547011466>



『幸福実現党』の党员の方々ならば、日米開戦がアメリカからの誘導のもとに行われていたことはご存知でしょうが、実は第二次大戦後のベトナム戦争からイラク戦争にいたるまで、これとまったく同じことが世界中で行われてきたのです。

つまり下記の動画をご覧になれば分かりますが、東西冷戦の中で起きた多くの戦争が、実はグローバル勢力によるマスコミを駆使した世論誘導の結果、作り上げられたものだったわけです。

動画『誘導して戦争をつくるアメリカの実態』(2分13秒) →<https://vimeo.com/547314696>



ベトナム戦争も、グローバル勢力に操られたアメリカによる、自作自演の「トンキン湾事件」の結果、起きた悲しき戦争であった、これは歴史的事実です。

しかも1966年10月、ケネディ大統領の暗殺によって大統領になった当時のリンدون・ジョンソンは、アメリカがソ連など東欧諸国に対しても、貿易の最恵国待遇を与えると声明を出しています。そして実際にアメリカは、ソ連などに総額300億ドル（1ドル当時360円のため約10兆円）も融資しました。

本当にアメリカ国民も、そして私たち世界人類も、騙されていたわけです。なぜならソ連はこの資金を「非戦

略物資」の輸入に当てたからです。しかし驚くべきは、「非戦略物資」の範囲であり、石油、航空機部品、レーダー、コンピューター、トラック車両などが入っています。これらは明らかに戦争に使用できます。

そしてソ連は、そのアメリカから受け取った300億ドル相当の物資を、ベトナムに送って北ベトナム軍を支援していたわけです。アメリカは南ベトナムから米兵を送り込んで、北ベトナム軍と戦い、はげしいベトナム戦争を行なっております。つまりアメリカ国民は、自国の兵士を殺傷するために、はたらいて、はたらいて、高い税金を支払って、ソ連と北ベトナム軍を援助をしていたわけです。

ベトナム戦争は1965年から始まり、1975年まで十年間も続き、なおかつ実質上、アメリカは中国やソ連も関わったこの代理戦争に敗れた、と言われております。亡くなった米兵の数は約5万人、帰還後に自殺した兵士の数は約15万人です。この戦争を機に、アメリカではホームレスが増え、ヒッピーが増え、数千万人の麻薬中毒者が生まれ、アメリカ社会はかなり退廃していきました。

しかし「軍産複合体」は、ベトナム戦争が長引いてくれたおかげで、莫大な利益を得ました。

問題なのは、北朝鮮や中国のマスコミが自国の政府にとって不利益な報道をまったくしないのと同様に、日本とアメリカのマスコミも、こうした“アメリカの裏の顔・グローバル勢力”については、現在までもまったく報じていないということです。

つまり「私たち日本人やアメリカ人も、北朝鮮や中国の国民と同様に、マスコミによるフェイクニュースによって誘導されていた」ということです。これが政治の裏です。

こうしたことから我々日本国民は、アメリカとの同盟を保ちつつも、誰から日本を守らなければならないかが分かります。「守るべき相手は中国共産党だけではない」、私はそれが言いたいのです。

なぜなら【下巻】で詳しく述べますが、実は私たちはこうしている今も誘導され、そして間接的に虐殺されていたからです。その証拠の一つとして、かつてのバイデンの政治的な上司であり、ヘンリー・キッシンジャーと並んで、アメリカ政界に大きな力を持っていたズビグネフ・ブレジンスキーは、「これまでの時代は誘導することが簡単だったが、しかし大衆が政治に目覚め始めている現在は、誘導するよりも虐殺のほうが簡単である」と明確に述べています。ぜひ下記の動画をご覧ください。

動画『ブレジンスキー「誘導より虐殺」』(1分59秒) →<https://vimeo.com/547314658>



実はトランプ革命が起こる前に、善良なるアメリカ国民たちが、軍産複合体・グローバル勢力によって、アメリカが間違った方向に突き進んでいることに目覚めはじめていました。下記の動画にもありますように、トランプだけが立ちあがったのではなく、正義感に燃えたアメリカの善良なる国民が、祖国のために立ちあがったからこそ、トランプ革命が起きたのです。だから我々日本人も同じか、それ以上のことをしなければならないのです。

動画『イラク戦争に行ったアメリカ兵の告発』(4分20秒) →<https://vimeo.com/547038552>



ディープ・ステートと戦った火之迦具土神

このように、たしかにアメリカには“正義の一面”と“邪悪な一面”の二つの面があります。

そしてその“アメリカの邪悪な顔”は、近年になって、より鮮明に明るみになってきました。

すなわち我々仏弟子は、“情報”というものに対して常に鋭敏であるべきなのですが、しかしその“情報”は、今まさに進化の真っ最中にあるということです。

たとえば冷戦が終わって90年代に入ってから明らかになった文書に、『ヴェノナファイル』というものがあります。この文書によれば、第二次世界大戦当時の大統領フランクリン・ルーズベルトの周囲にいた者たちは、実は共産主義者であり、ソ連のコミンテルンと繋がっていたことが歴史的事実として分かっております。つまり中国にも共産主義者はいますが、アメリカにもかなり昔から共産主義者たちが大勢いたわけです。そしてその共産主義者たちは、実は今も健在なのです。

2021年4月18日、日本の菅首相とバイデン大統領は、ハンバーガーを置いたテーブルを挟んで日米首脳

会談を行いました、そのハンバーガーには手もつけず、この会談はわずか20分で終了しました。通訳もいますから、「おそらく両者は各5分くらいしか話していない」、と言われております。しかも男子ゴルフのマスターズで、初めて日本人が優勝した話が話題になったというのですから、この日米首脳会談で政治の話が出来ていたのか疑問です。

しかしそれからさかのぼること二日前、菅首相は副大統領のカマラ・ハリスから表敬訪問を受けて、約一時間にわたって話しております。半数近いアメリカ国民が「バイデンは認知症」と考えていることから、実質の権力者は大統領ではなく、副大統領のハリスにあるという話もあります。そして彼女はかねてより言われているように、共産主義者の可能性が高いのです。

アメリカにはたしかに先の第二次世界大戦から現在にいたるまで、「共産主義」という名のマイナスの波動が存在しております。下記の動画にもありますように、元CIA・NSAの職員でもあったエドワード・スノーデンが、アメリカが築こうとしている監視社会を暴露してロシアに亡命したように、アメリカの裏の顔は、たしかに中国とよく似たものがあります。

動画『映画「スノーデン」予告編』(1分49秒) →<https://vimeo.com/544202625>

以上のことから分かりますように、アメリカには確かに闇があるわけです。ですから八百万の神々の一柱である火之迦具土神^{ほのかぐつちのかみ}が天下って、イラクのフセインとして戦ったのは、厳密にはアメリカそのものではなく、トランプが「ディープ・ステート（影の政府）」と呼び、欧米圏や日本に対して強い力を持つ邪悪な勢力でした。



下記の動画をご覧になればよく分かりますが、「ディープ・ステート（影の政府）」、これはもはや都市伝説でも陰謀論でもなく、現実存在している勢力です。

動画『トランプ「ディープ・ステート発言」』(18秒) →<https://vimeo.com/547034898>

資本主義の闇に眼を向け、ディープ・ステートの存在について考え、そして資本主義と共産主義が戦ったとされる「米ソ冷戦」について考えると、学校の授業で習ったこととは、まったく異なる歴史が見え始めるのです。



狡猾に侵略している彼ら

映画『ノストラダムス戦慄の啓示』の中で、ノストラダムスはアメリカに対して、こう言っています。「大きな犠牲のもとに成り立っている驚の大国よ。」

お前たちは正直な人間ならば“恥だ”と思うことを、“正義”という名のもとに行っている。

しかし私は言う。キリストの日記の中には、お前たちの繁栄が記されていない」

しかもこの映画の最後のシーンでは、アメリカ大陸は地球上に存在していませんでした。先生の霊査により、「アメリカはトス神が指導されている」ということが分かっておりますが、トス神はアトランティスの神であり、そのアトランティスはアガシャの時代に滅び、そして経典『黄金の法』にも、「アメリカ大陸はアトランティス大陸のように海に沈む可能性がある」ということが記されております。

こうしたことから、どう考えてもアメリカにも悪質宇宙人が入り込んでいる可能性が見えてくるわけです。

そして下記の動画にもありますように、実際にカナダの元国防大事のポール・ヘリヤー氏は、公の場で“宇宙人の存在”を認めると共に、“アメリカ”と“宇宙人による影の政府”についても言及しました。

動画『ポール・ヘリヤー氏「彼らは陰の政府になっている」』 →<https://vimeo.com/546433796>

今、ご紹介した動画のポール・ヘリヤー氏の「宇宙人が陰の政府になっている」、「少なくとも2人の宇宙人がアメリカ政府で働いている」という証言は、とても衝撃的ですが、しかし彼のこの証言を裏付けるものとして、エリア51の職員からアメリカのとあるラジオ番組に、こ



んな電話がかかってきて話題になったことがあります。

動画『エリア 5 1 の元職員からの電話』(2 分) →<https://vimeo.com/547030370>



「軍産複合体」について、初めてその名を退任演説で明かしたアイゼンハワー大統領ですが、彼の曾孫であるローラ・アイゼンハワーは、「アイゼンハワー大統領が宇宙人と接触していた」と語り、なおかつ「宇宙人が地球を侵略しようとしている」とか、「自身も火星に行ったことがある」とか、驚きの内容を世界中のメディアで語っております。

先生の霊査からも、米軍と宇宙人が軍事的な契約を交わしているのは明らかですが、問題なのは、「アメリカが果たしていかなる宇宙人と契約を交わしているか？」という点です。

そしてアレックス・コリアーというアメリカ人は、「自分はアンドロメダ星人に会った」と語り、世界中で講演を行ったりしているのですが、彼が語るその宇宙人情報が、実は先生が教えてくださる宇宙人情報に、とても似ております。彼は下記の動画の中で、「レプタリアンたちがアメリカの子どもたちをさらっている」と、怒りまじりに次のように訴えかけました。

動画『レプタリアンに子どもたちが・・・』(6 分) →<https://vimeo.com/551377898>



アレックス・コリアーの言葉からも、アメリカの軍部と契約することで、アメリカに入っている宇宙人が悪質宇宙人レプタリアンである可能性は多いにあります。

そしてアレックス・コリアーは、下記の動画の中で地球人と日本人について、「地球人は宇宙の中で皇族のような存在であり、日本人こそ地球の精神的指導民族である」とまで語っているのです。

動画『人類は皇族で日本人がメンター』(4 分) →<https://vimeo.com/551378878>



以上のことから、アレックス・コリアーの言葉は先生の教えと反れてはなく、むしろかなりの信憑性があります。

『幸福の科学』の方ならば、日本がU F O 後進国であることをご存知かと思いますが、その最大の理由の一つにアメリカからの要望が考えられます。なぜなら下記の動画をご覧になれば分かりますが、日本には一つも無いはずの「U F O 目撃情報」が、実はアメリカにはたくさんあるからです。それはアメリカで機密解除された公式文書からも明らかです。

動画『日本がU F O 後進国である理由』(7 分) →<https://vimeo.com/546462659>



【下巻】で詳しくお伝えいたしますが、日本という国は先の大戦以来、アメリカからかなり内政干渉を受けており、アメリカの望む政治が行われてきました。そのためなのか、日本では航空自衛隊でも、民間旅客機でも、たとえU F O を目撃しても、その証拠を公にさしたり、発言することはできないわけです。

これは明らかにおかしいことであり、アメリカの背後に“陰の政府”としてグローバル勢力があり、そのグローバル勢力の背後に悪質宇宙人がいるならば、その意味が分かります。おそらくレプタリアンたちは、自分たちの姿を隠して、地球侵略の脅威から人類の目を背けたいのでしょう。その結果、日本は「U F O 後進国」になっているのでしょう。

単純に言って「宇宙協定」が存在している以上、悪質宇宙人は直接的に地球侵略をすることはできず、彼らが行う作戦は“陰謀”しか考えられません。また悪魔もエデンの園でイブをそそのかした手口も、やはり“陰謀”でした。

まさに私たちの戦いは、国家を超え、次元を超え、地球をも超えた霊界宇宙戦争なわけです。

そしてこの戦い勝つには、やはり政治の裏側にも目を向ける必要があります。

我々こそ新世界秩序を築く

すでに【上巻】で述べましたように、私自身、こうした“もう一つの政治”に気がついていく時、「自分は職員として、こういう先生が明確に説かれていないことを発信はするべきではないのではないか」と考えて、悩んだ時期がありました。しかしある時を境に、私は勇気をもって、こうした発信を始めました。

私が勇気をもって発信を始めたその最大の理由は、【上巻】で述べましたように、先生の経典や映画を学び直すと、けっして教えに反れたものではなかったからであり、そして何よりも先生が『国際政治を見る眼』というご説法の中で、『幸福の科学』が発信することが新世界秩序の基準となる」と、はっきりと述べられたからです。

『国際政治を見る眼』／国際政治を見る眼／2 世界の潮流と「新世界秩序」

何となく、「当会が発信することが、『New World Order（新世界秩序）』の基準になっていくのかな。それを、政治が後追いしてくるのかな」というようには見えてきたので、当会の発信は非常に重要なのではないかという感じがしています。

「先生が New World Order と述べられた」、これが私の中での「GOサイン」でした。

なぜならこのグローバル勢力は、「New World Order（新世界秩序）勢力」とも呼ばれているからです。なぜ彼らが「New World Order 勢力」とも呼ばれるのか、それは【下巻】で詳しく説明いたしますが、彼らが経営している中央銀行が発行している 1 ドル紙幣にも、ラテン語で「New World Order」と記されているからです。

そして下記の動画をご覧になれば分かりますが、バイデンと同じくグローバル勢力の大統領で、なおかつフセインと戦ったブッシュも、やはり 9 1 1 テロからちょうど十一年前の 1 9 9 0 年 9 月 1 1 日、「世界秩序へ向けて（Toward a New World Order）」と演説を行っていました。



動画『ブッシュ「New World order」』（1 分 45

秒）→<https://vimeo.com/551887205>

一方で先生は、プーチンの霊言も出されており、その書籍のタイトルはズバリ『日露平和条約がつくる新・世界秩序 プーチン大統領守護霊緊急メッセージ』です。実はこのプーチンこそ、フセインと同じくグローバル勢力と戦ってきた大統領であり、だから彼は日本の政治を叱っているわけです。



下記の動画をご覧になれば分かりますが、プーチンはロシアの大勢の外交官たちに向かって、グローバル勢力が築かんとしている「新世界秩序」について、「アメリカ産の新世界秩序はお断り、それは刑務所の中で暮らすようなもの」とスピーチをしております。

動画『プーチン「アメリカ産新世界秩序お断り」』（1 分 31 秒）→<https://vimeo.com/551887225>

つまり総裁先生は、「中国共産党を銃弾一発使うことなく解体する」と述べられるがごとく、『国際政治を見る眼』というご説法の中で、グローバル勢力に対しても、「New World Order を築くのは我々である（貴方たちではない）」と、正々堂々と向こうを張られたわけです。



グローバル勢力が好んで使っている「New World Order」という言葉が偶然、重なるはずがありません。そしてグローバル勢力は 1 %のみが幸せな新世界秩序ですが、先生の新世界秩序は全員幸福の世界です。これを考えても先生が「宗教家とは不正を見て黙ってられない」、「潔く戦うべき時は戦う」、「誰も言わないならば言わねばならない」、そういった正義と勇気の姿勢を、再び私たち直弟子に見せてくださったことが分かります。

もちろん私はけっして「アメリカを敵視しよう」とか、「アメリカとの同盟関係を切ろう」とか、「アメリカとの良好な関係を壊そう」とか、そんなことを主張しているわけではありません。私の主張はただ単純に、「日本の政治が、すでにグローバル勢力に都合の良いものとなり、日本の国益を損なってきましたし、今後もその流れがあ

るために、アメリカとの友好関係を保ちつつも、日本の国益をグローバル勢力からも守ろう」と、そう述べているに過ぎません。

そろそろ日本の本気を

はっきり言って「グローバル勢力」とも、「ディープステート」とも、「NWO勢力」とも呼ばれる勢力を度外視したままでは、「国際政治を正しく見えている」とは言い難いでしょう。それは表現を変えれば、「世間を正しく理解できていない」とも、「世間解が足りていない」とも言えるかもしれません。

世間解とは、「世の中のことをよく知っている」ということあり、「仏の十号」とも呼ばれる仏陀の称号のことであり、やはり大伝道を行っていくにも、政党が大勝利するためにも この“世間解”はとての大切です。

この「世間解」について、先生はこう教えてくださっております。

『信仰告白の時代』／第6章 心は何に挑戦すべきか

仏陀は、「如来十号」というように、いろいろな名称で呼ばれていますが、そのなかでよくいわれるのは「世間解」という名称です。「世間をよく解^{かい}する人」「世の中の道理や社会のあり方を非常によく知っている人」という意味で、仏陀はよく「世間解」と形容されています。

みなさんは、出家をしたら脱世間であるから、出家者は世間のことを知らなくてもよいと思うかもしれませんが、そうではありません。仏陀自身は世間のことをよく知っていたのです。仏陀は、マガダ国王やコーサラ国王などから、さまざまな政治的問題について判断を求められても、答えることができました。それは、「こういうことをすれば、このようになる」というように、ものごとの道理をよく知っていたからです。

先生は「たとえ出家して脱世間であっても、世間解は大切であり、世間を理解した上で、『こういうことをすればこうなる』といったふうに、原因と結果を見抜くことが大切である」と、そのように教えて下さっております。そして先生は「愛とは理解することである」とも、「愛からの発展、愛が発展を呼ぶ」といったことも教えてくださっております。

また『人を愛し、人を生かし、人を許せ』という教えでは、「生かす愛に必要なもの」として、次のようにも教えてくださっております。

『人を愛し、人を生かし、人を許せ。』三 生かす愛に必要なもの … page. 52

「こうすれば、その人はこうなる」「こうした教えを説けば、このような反応がある」「こうした努力をすると、このような結果になる」などという原因・結果のプロセスが見えないと、人を正しく導くことは難しいのです。

それゆえに、幸福の科学で説いている「知」は、実は「原因・結果のプロセスを見抜く力」と言ってもよいでしょう。「こうした種をまけば、こうした実ができる」という関係を知ることが大事なのです。

以上のことから、政治について表も裏も共に詳しく知り、世の中のことを深く理解することは、大伝道していくにも、政党が大勝利するためにも、とても大事なことが分かります。なぜなら人を愛し、生かし導くためには、相手のことを深く理解し、こうした種をまけばこうした果実が成るという原因と結果のプロセスを見抜かなければならないからです。

しかし実のところ、あまりにも現代の政治が複雑怪奇であるために、この「世の中のことをよく知り、政治を裏も表も理解する」ということが、非常に難しいのです。たとえば本当か嘘か、元陸上自衛隊の陸将補である池田整治氏は、北朝鮮と軍産複合体との関わりとして、こんなことも述べております。

動画『池田整治発言「横田と平壤」(2分29秒) →<https://vimeo.com/551933463>

今の池田氏の話は信じ難い内容ですが、しかしグローバル勢力の手先として、世界中で暗躍してきたC I Aが、北朝鮮だけを見逃すはずもなく、彼の言葉からも、なぜこれまでのアメリカの政権ではアメリカと北朝鮮が敵対して、しかしトランプ政権ではアメリカと北朝鮮が歩み寄ったのかが分かります。



かつてイエスは「鳩の如く純真で、蛇の如く賢くあれ」と述べました。蛇というこの爬虫類の生き物は、「エデンの園」で蛇に化けた悪魔が、イブをそそのかして楽園を追われたことから、キリスト教社会では悪魔と同一視されるほど忌み嫌われております。しかしイエスはそれを承知の上で、「鳩の如く純真で、蛇の如く賢くあれ」と述べたわけです。これは「純粋な信仰心を持ちながらも悪魔を出し抜け」という意味にも取れます。

私の TOEIC の点数は「10点」です。ですからもちろん私が、ありとあらゆることを熟知しているわけではありません。私も短所や弱点のある人間の一人です。しかし“陰謀”、あるいは“もう一つの政治”、もしくは“政治の裏”について、私は「それなりに知っている」という自信があります。

つまりいろいろな仏弟子がいろいろな知識を持ちより、一致団結し、そして「世間解」を深めて、智慧を結集させていくからこそ、世間を深く理解して正しく導いていく、ということができるのではないのでしょうか。

これを踏まえまして、この【下巻】をお読みいただければ幸いです

すでに【上巻】でも述べましたように、当会に貼られた“カルトの烙印”を剥がし、日本国民の“常識”を破壊するだけのことが、実はすでに日本ではたくさん起きております。

ですか【下巻】を読まれれば、これまでの“常識”が音を立てて崩れていくことでしょう。

映画『ノストラダムス戦慄の啓示』の中で、ノストラダムスはアメリカに対して、こうも述べています。

「しかもこの驚は大きな過ちを犯した。

海の怪獣リヴァイアサンを鱈（フカ）だと錯覚した。

しかしお前が鱈だと思ったのは、巨大な海の怪獣なのだ」

立党十二年が過ぎ、もうそろそろ日本の本気を、世界に見せつける時と言えるのではないのでしょうか。

幸福の科学 職員 与国秀行